

いつも新しい恋愛のカタチを教えてくれる映画たち。

愛のカタチを

話題の映画で観ていると

たかのてるみ

映画はいつだって素敵な恋の仕方を教えてくれる存在だ。

考えてみれば、恋愛モノと銘打った作品でなくても、ほとんどの映画が、実は恋愛モノなのだと思う。ミステリー仕立てであっても、アクションモノであっても、そのシチュエーションや演出の仕方が、絵に描いた様なメロドラマではないだけで、男と女が出会って恋に落ちて愛する様になり……というドラマが背景になっていることは、かなり多いのだ。『07』だって、『インディ・ジョーンズ』だって、『バットマン』でさえ、いわゆるひとつの恋愛は、展開するわけだ。

そういった意味での代表は、ヒットコック作品だと思う。中でも『めまい』は、極めつき。濃厚なラブシーンなどないのに、ものスゴク、官能的。ヒッチコックのモノはいつも洗練され知的な仕上がりだけに、その奥にある男と女の情念の行方によりともさせられるのだ。

映画のほとんどが、恋愛モノであるということの意味は、映画が人間の人生そのものを、あるいは人生のほんのつかの間を映し出す存在である以上、人間が、男と女が、恋愛なくしては生きられないということ物語っていることにもなる。



『夜のめぐり逢い』 久しぶりのドヌーブが人妻役に登場のある夜の出来事。奇妙な出会いから恋が生まれる。メロドラマをテレビではなく、あえてスクリーンで、は今年ナウイかも。F・デュペイロン監督'90年2月シネ西友にて。



『愛の嵐』 倒錯の愛に身を投じ、平凡で平和な結婚生活捨て、過去のただれた、しかし甘美な思い出に再び酔う女。あの名作がもう一度公開される。リリアーナ・カヴァーニ監督。'90年1月中旬キョ青山で。



『危険な情事』 まるで自分みたいだと思われた男性も多かったと聞くこの映画。そのへんにいつ起こってもおかしくない不倫のてん末。観ているうちに、愛人側の心理に共鳴した女性も少なくなかったそうですよ。

それにしてもほんとうに、男と女は恋をするのが好きですね。いつもいつも愛に酔いたいし、セックスをしてお互いを知りたがる。映画の数だけある、様々なひとつとして同じものはないその愛のカタチは、時代を経て、描かれ方もいろいろ。その点でひとつ言えることは、ひと頃までは、

「映画の中のオハナシだから」

というセリフに代表される様な、現実とは大きなギャップのある恋愛が、スクリーンに展開していたという事実なのだ。つまり、その恋愛のカタチは、かなり大胆、キワどかったり、アンモラルであっ

たり、異常であったりすることが多く、

観客側の一般の男女からすると、自分のやり方や体験とはまったくかけ離れていて、だから、あれは映画のオハナシだよ」というセリフが生き残っていたわけなのだ。それじゃあ、どこが一般のオハナシとかけ離れていたかと言うと、もちろん性描写においてであった。性についてナチュラルに語れなかった時期には、それ自体が、映画のテーマにもなった。それだけ性が解放もされていなかったし、語ることさえタブーとされていたからだったと思う。こんな風に男と女が愛し合えたらという願望、羨望もあって、そんな気

持を美化し、耽美的にも芸術的にも描けるのがまた、映画ではあった。

『愛の嵐』とか、『ラストタンゴ・イン・パリ』は、当時センセーショナルで、変態的な映画とまで言われ、大評判になったけれど、今は、あれでも芸術的過ぎるくらいで、あくまでも美しい。

時間の経過とともに、最近では観客側のほうがススんでしまつて、映画に描かれる恋愛より、大胆さや、アンモラルさでは充分勝つていると言えるわけで、

「映画みたいな恋をしたい」

なんてセリフも、最近では流行らない。